

## 福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について：大陸舶載の陶磁と銀鋳

岡崎，敬  
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7178550>

---

出版情報：九州文化史研究所紀要. 13, pp.1-28, 1968-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# 福岡市(博多)聖福寺

## 発見の遺物について

——大陸船載の陶磁と銀銚——

岡 崎 敬

—

聖福寺<sup>1)</sup>は、現在福岡市(博多)御供所町にあり、建久六年(一一九五年)、栄西禪師が宋人百堂の跡にひらいたとつたえられている。正平十年(一二五五年)創建の建物が朽損したので、造営をはじめ、二十二年落成した。永禄六年(一五六三年)諸堂伽藍灰燼に帰し、元龜元年(一五七〇年)復興したが、天正十四年、再び蕩尽した。

天正十五年(一五八七年)、小早川隆景が筑前国に封ぜられ、再興を志し、天正十七年伽藍ようやく旧観に復し、現在にいたつた。江戸時代には仙崖和尚をはじめ傑僧が輩出したことは、よく知られているところである。

聖福寺のある場所は、博多湾を弧上にめぐる砂丘上にあり、その東は千代松原の砂丘につながるのであるが、近世、聖福寺の東に石堂川を掘鑿した。聖福寺の東北、大博劇場の南は標高六・二メートル、聖福寺門前で五・七メートル、承天寺の南では四・六、四・九メートルをはかる。大博劇場、大丸の北はかつての「袖の港」で、入海とな

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

つていた。呉服町の「大丸」の建設工事では、多量の陶磁器などが、「豊国生命ビル」建設工事では、棧橋とおもわれる杭、下駄、桶などが発見された。

現在の聖福寺は標高平均四・八一四・三メートルの間にあり、その東方よりやゝ低平な個所をしめている。

栄西禅師創建の際の事情や、その立地条件から考えて、この土地が日宋、日元貿易など大陸との交渉上、きわめて重要な地域であつたことはうたがいない。

このことは、江戸時代に聖福寺境内で数次にわたつて発見された遺物や、戦後、山門と大雄宝殿の間より発見された陶磁などからもうかゞい知ることができるのである。現在、江戸時代のものはすべて散逸してしまつてゐるが、これを整理してみると、きわめて重要な資料をふくんでいることに気がつく。いま先ず江戸時代よりはじめ近年にいたる、発見の状況を紹介することからはじめたい。

註

1 小島文鼎「聖福寺史」十卷、三宅安太郎氏の校訂により、昭和三十九年聖福寺文庫刊行会より刊行された。

## 二

江戸時代、元禄十一年(一六九八年)享保元年(一七二六年)同八年(一七三三年)宝永年間、宝暦八年(一七五八年)の五回にわたつて、瑞応庵、虚白院、天得庵などから、遺物の発見された記録がある。瑞応庵における元禄、享保、年間の発掘では、金、銀をまじえた多量の遺物が出土したので、後にのべるように各方面の著書にとりあげられたが、現在全く散逸してしまつて、記録以外にのこつていない。明治二十年瑞応庵を再発掘しようとして、とめられたという記録<sup>1)</sup>があるが、歳月とともに、近年まで、その地点も忘れさられていて、幸い最近この地点をつきとめることができたのであつた。

戦後、山門と大雄宝殿の間の工事中、砂中より水注と皿が発見された。久留米の石橋美術館における展覧に出品されたことがあるが、水注は越州窯によくみる形であることが注目されたのである。

1 元禄十一年（一六九八年）十二月十二日

聖福寺の子院、瑞応庵で、墓地をほつていたところ、石の下に壺あり、中より金銀製品を出土したという。貝原益軒は『筑前統風土記』巻之四に、その時の事情を記録している。

「こゝに当年十二月十二日、博多宗満町の民、三宅傳兵衛が息女、病んで死す。聖福寺の子院、瑞応庵に葬んとして、役夫墓地をうかつ事三四尺許。地中に石あり。其下より忽に一の壺をほり出せり。ふたをひらき見れば壺中悉く金器也。僧徒より福岡の有司に其由を告しかは、監吏来て、是を点検せしに、壺中の金器、花銀、金花銀、金銭、銀錢、団金、片金其外金にて作れる禽獸蟲魚の形、品々多くして枚挙し難し。其体製皆中華良工の所作にて、日本の製に非ず。是いにしへ乱世に兵火をさけて、こゝに埋みしなるべし。丹岩是を封して、邦君綱政公に上つる。綱政公此時江戸に述職し玉ひしが、其内文字を刻める金銭、金花銀各一枚をとゝめ、其余は悉く丹岩に返し賜ふ。はじめ壺をひらきし時、役夫賤人等あまた金器をつかみ取しを監司の輩相議して、是を取返して送り返さんとす。丹岩かたく制して、是彼傭夫等地を掘し力より出たれば、彼等が取しは得べき分なり、取返すべからず、況罪すべけんやとて傭夫等をせめ求る事をゆるさず。きく人これを感じず。其後金花を悉く集め鑄たりしに凡そ二百三十余両を得たり。此内金八両を彼墓の地主瑞応庵におくり、又銀百両を護聖院に寄て、開祖の祭奠を助く。其余は住持丹岩出世の費用とすべしとて給はりける。ついに翌年上京し、其志を遂たり。時の人おもえらく、是偶然の僥倖に非らず。丹岩和尚平日の宿徳所感の法福なるべし。彼亡女も亦宿世の善因によりて、かゝる妙果を開きしにやと、皆人いへり。」

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

2 享保元年丙申(一七一六年) 六月十八日

この年も瑞応庵の石塔の修補にあたつて、また壺をほり出し、中より金貳貫九百目、銀五貫三百目の銀、分銅などが出、銘に「郭徳浸」と記すものがあつた。『石城志』には

「彼亡女名をおて、遠忌に当りければ、兄惣兵衛綿屋な、石塔を修補すとて、又壺を掘出せり。金貳貫目差物を作りたるを合して。

銀五貫三百目、外に五百目の銀、分銅、あり。銘に郭徳浸とあり。百姓統譜に此名ありと云。本朝村上 此時、住持北瀧

長老、伽藍再興の発願に、諸国勧化に出て留守なりしに、越舟、文外、江山、古崖、知事、などといへる五僧等、貪

欲心を起して、おのおの私曲のふるまいあり。其事終に発覚せしにより、一山の不法なる事を咎められ、則公裁あり

て、北瀧は住職を止められ、五僧は追院せらる。」

葉山信果の「石城志」頭書書込みによると

「年表には享保八癸卯年三月十日とす。長野日記に曰。博多町人呉竹善三郎の妻と申すもの、先年相果て、聖福寺の内瑞応庵に葬り、石塔に地蔵を建立、所柄不宜に付、少々脇に引直し候とて六月十九日墓所掘處地蔵下に棺無之に付深く掘出し見候へば壺一つ掘出しに棺は地蔵あり少し脇に御座候由右の壺に金銀の作り物大分入居申候由、先年元禄十一年にも此所にて壺一つ掘出し候金銀の作物余分に入居申候由、旧記に相見て居申候由、此節掘出し候金銀の寛金貳貫八百七拾八匁四分、銀五貫參百貳拾匁目壹分」

とみえる。伊東東涯の「盞簪録」<sup>2)</sup>卷四、雜載録には、元禄十一年(戊寅)にひきつゞき享保元年(丙申)の発掘および出土品の内容について、かなりくわしい記載がある。日野開三郎教授所蔵本によりいまその全文をのせると、

「筑前博多鎮管下市小路町商人。有呉竹善三郎者。元禄戊寅歳妻死。葬本州聖福寺内瑞應庵、穿壙之次。得金銀器作法馬等物一嬰、悉以為修葺之資。置石佛一軀。以誌其处。後十九年。享保丙申之歳。以側旁竹茂、主僧命俾改塚、六月十九日移石佛、穿土三尺所、又得一嬰、比前稍大、内蔵金銀器物如前、得銀法馬八錠、合貳貫七拾四錢。其餘金鈴、金虎、銀刀鞘、金銀鑄造物象諸具甚夥。凡得金八百八拾八錢餘、銀五貫二百九拾錢餘。以今時金銀分兩準之。可

得百貫目價云。法馬上各鑿記字号。面三行。

○徑歷郭德潤

○行宣政院福建分院

○提調官副使側失監

背亦三行。

○客商謝福

○花銀肆拾捌兩重

○辨驗銀匠彭禎

○按元時諸路置行宣政院經歷官。元明俱有側失監似是人名。元相搆思監。想側失監是胡人名。然則所得銀錠等物、皆元時物。前世外國船舶、皆湊于筑州。故元時器物。亦埋土中。距今殆五百年餘。中國前代之制。儼然可見也。丙申九月廿三日記。

とみえ、銀法馬（銀錠）の図（図4）をのせている。おなじく東涯の『輪軒小録』に「元世銀法馬ノ事」<sup>3</sup>について記し、やゝ詳しく説明している。中村幸彦教授所蔵本によりいまその全文をあげると

「亨保年丙申年彼石佛脇藪竹生シケルニ依テ彼墓ヲ一二尺ワキヘ移ス。六月十九日其処ヲ掘リケレバ亦壺一ツ掘出ス。此壺前ヨリ大也。其中ヨリ銀ノ法馬八錠ヲ掘出ス。大体長サ四寸五分程。重サ四百九十目余余アリ。大三ツ小五ツ有テ料目少々不同。小成物長サ二寸五六分有リ。其法馬表背ニ文字アリ八ツニテ合ニ貫百七拾四目二分アリ。其余、金鈴、金虎、銀ノ刀鞘、金銀鑄ノ造物諸具品々出ル、銀目合シテ五貫目余モ有ト云、其法馬ノ形如左」とみえ、図を記して、「右ノ形ヲ考ルニ元ノ世ノ物成ルヘシ、元ノ時ニ諸道ニ行宣政院ト云官府ヲ置、一道ノ政事ヲ掌ル。經歷ハ其下役人ノ官也、提調官府司ト云ハ其官ノ司トシテ正使ノタスケ也、側失監ハ韃人ノ名ト見ヘタリ、元ノ時ニ丞相搆思監ト云人字ハ異ナレトモ其音相近シ」

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

とみえていて、享保元年六月十八日の聖福寺出土品についてもつともくわしい記録をのこしている。「石城志」、「長野日記」、「盞簪録」、「輪軒小録」それぞれ発見の事情に異同があるが、三宅傳兵衛の娘がテフ、その兄が惣兵衛であり、その夫が呉竹善三郎であつたとすれば、理解がつく。つまりオテフの父や兄の三宅傳兵衛、惣兵衛の名があらわれるので、この点、いさゝか混乱したのである。

### 3 享保八年癸卯（一七三三年）二月廿五日

この年、瑞応庵の同じところが盗掘され、壺中またまた金銀製品が出土した。壺は都合三個目である。「石城志」にはその時の事情を記しているが「聖福寺史」には「旧記」を加え、さらにくわしい記載がある。

「偷兒夜に乗じて同庵墓地に入り、窃かに地を鑿ちて宝を奪い去る。其の遺留したる銀器壹個あり。中に白銀九貫六百六拾匁目、銀製珍器壹四百貫、法馬七拾叁個、大なる者は五百匁目、小なる者は式拾五錢、五百匁目法馬の刻字、正面には「辨驗銀匠彰禎」左方に「華銀五拾兩重」、右方には「客商謝福」、裏面に「金花銀」とあり。又「太平興國福建文員経歴使郭徳順製」と刻みたる者もあり。按ずるに「百世統譜」に「郭徳順」の名あり、本朝村上天皇の御宇、宋国太祖皇帝の時にして、享保七年に至り、七百六拾余年なり。住持円珪其一を禁廷に奉獻し、其一を妙心寺に納め、其余は鎔解して之を市人に法却す。市人之を京師に輸し、大いに貨殖せり、又津内にて数人及び久留米梅林寺にも此の銀を貸付たり。然るに市人之が為に一時貨殖したる者は、其家漸次衰微したりと云ふ。亦た奇と謂ふべし」

とある。「石城志」には「右金銀の作りものは、塔頭継光庵の境内にて、刀鍛、守一権次といふ者鋳造し、掠三郎右衛門といへる商人、是を買取て京都に持上り大いに利潤を得たり」

とみえる。

#### 4 元禄、享保年間発見地点の確認

昭和四十二年十一月十三日の午後、この前節までかきあげて、窓より空を見上げた。久しぶりの秋晴れで、日もうららかなのである。これまで何度か、聖福寺の境内を散索し、瑞応庵の墓地をたずねたのであるが、元禄、享保年間発見地点をつきとめることができなかった。しかし以上のべたことを要約すると問題の墓は

##### ① 元禄十一年十二月十二日歿

##### ② 三宅傳兵衛の息女（筑前続風土記）名をおてふと云。

兄は綿屋の惣兵衛（「石城志」）、博多町人呉竹善三郎の妻（葉山信果「石城志」頭書書込み、伊東東涯「盃簪録」、三宅傳兵衛の女「テフ」、法諭雪庭智白善尼と曰ふ。其墓今尚同庵の西に在り（「聖福寺史」）

##### ③ 置石佛一軀。以誌其処

ということなり、当然、「元禄十一年十二月十二日歿、雪庭智白善尼」の銘があり、石仏がある墓石が、瑞応庵の西にあるはずである。

瑞応庵の門をくゞつて、件んの墓地をたずねてみると、「元禄十一年、雪庭智白禅尼」の銘をほつた、石仏をいたゞく墓石があるではないか。いさゝか眼をうたがつて、みてみたが、どうもまちがいないので、その記録をとり、瑞応庵の庫裡くらをたゞいてみたが、不在らしいので、門をでようとすると、はからずも瑞応庵の住持、梅巖自悦師におあいする。その墓石のことを申すと、三宅氏の後裔、三宅淳介氏はいま長崎市におられるので、過去帖もある筈だといって、三宅氏には失礼ながら、それを整理したものが左の家系図である。

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

岸本茂左エ門——女子

惣兵衛（三宅伝兵衛を相続）

勘兵衛（岸本家をつぐ）

三宅傳兵衛

女子

（寂庵恵照禅尼）？

娘テフ

（雪庭智白禅尼）

女子

（寂庵恵照禅尼）？

〇〇ハ三宅氏系図ニミエズ

呉竹善三郎

「オテフ」（雪庭智白禅尼）の墓の左には三宅傳兵衛、その右には同じく石仏をいたゞく、女性（寂庵恵照禅尼）の墓がある。たゞし過去帖系図にはこの女性「オテフ」と呉竹善三郎の名はみえない。しかし、墓石の關係からいって、オテフは傳兵衛と寂庵恵照禅尼との子供か、姉妹になる。「石城志」にみえる兄、綿屋の惣兵衛は先妻の子である。呉竹善三郎のことについては、いまのところよくわかつていない。呉竹姓は現在の檀家にはない。「オテフ」はおそらく結婚早々歿したか、うまくいかなかつたのか、三宅家の手で葬られている。梅巖自悦師の御協力を得て、こゝまでわかれば、こゝが元禄、享保の発見地点であることはまちがいない。梅巖師のはなしでは、近々こゝを整理して、納骨堂をつくるので、それは大へんだということであつた。

早速このことは聖福寺史の資料整理にうちこんでおられる三宅安太郎、筑紫豊氏に報告、考古学専攻学生諸君と聖福寺朝鮮鐘拓本実習の際、鏡山猛教授と御一しよに聖福寺老師龍淵戒道師に御報告をする。老師はそれは御苦勞さんといわれて、大徳寺納豆に茶を一服たてゝくださったが、いまだにそのうまさは忘れられない。

5 宝永年間（一七〇四—一七〇九年）

虚白院の土地から、二つのかめより朱漆椀が出土した。「聖福寺史」によると

「享保より以前宝永年中に、虚白院の地を鑿ちて朱椀五拾具を得たり。每具四個、之を式鬘に納る。盤谷禪師の時、既に悉く散逸して僅に壺個を存する而已。納るる所の鬘も一は虚白院に存し、一は節信院に在りしか今は亡せり」

とみえる。虚白院は現在玄住庵内にあり、いまの玄住庵の建物の西北にあたる。

6 宝歴八年戊寅（一七五八年）

天得庵の竹林を開いた際、南京窯の瓷器が出土したという。

「聖福寺史」に

「天得庵鎮守堂の南圃の竹林を開鑿するに当り、南京窯の瓷器を得たり。大小式拾七箇、皆珍奇器なりしと云ふ。」

とみえる。天得庵は現在ない。『聖福寺史』廃寺録・塔頭部にもみえない。旧聖福病院跡の土地かも知れぬとのことであるが、いましばらく疑いをのこしておく。

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

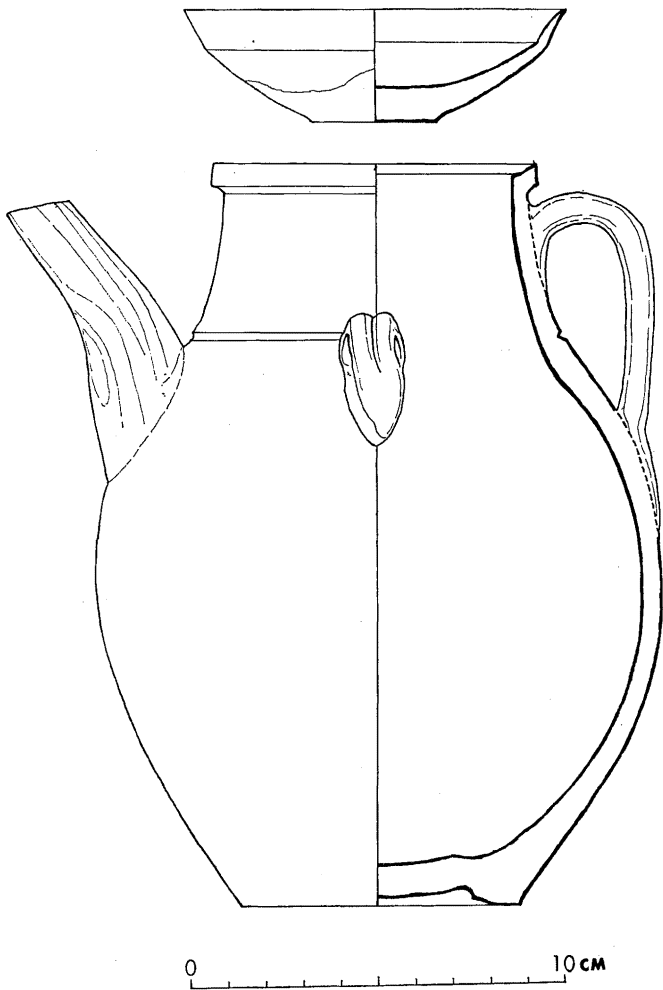
博多・聖福寺境内発見の一括遺物

	発見年次	場 所		出 土 品	
1	元禄11年 (1698年)	瑞応庵	1 壺中より	金器、花銀、金花、金銭、銀銭 団金、片金、金製、禽獸蟲魚形品	今なし
2	享保1年 (1716年)	〃	〃	(法馬) 8、金鈴、金虎、銀刀鞘 、金銀器	〃
3	享保8年 (1723年)	〃	〃	銀器、白銀、銀製珍器 法馬(銀錠) 73個	〃
4	宝永年間	虚白院	2 罍中より	朱椀50個	〃
5	宝暦8年 (1758年)	天得庵竹林		南京窯瓷器27個	〃
6	昭和20年代	山門・大雄 宝殿の間	地下2 m	青瓷水注1個、皿1個	現 存

7 昭和二十年  
代

戦後、数年たつたころ、山門と大雄宝殿の間を工事のため、ほつた際、地下二メートルばかりのところ、砂中より水注一個と皿一個が出土した。皿は水注の蓋のようにおかれていたというが確実ではない。

水注（図3、第1下）は、高さ十九・八センチ



第1図 福岡市聖福寺出土の青磁水注と黄緑釉皿

チ、口径八・六センチ、底径七・五センチをはかる。底は円盤状台でなく自然なカーブをなす平底である。口径は目のあと五個がつく。注口はけずり出しの跡がのこつており、双耳、把手がつく。胎土は褐色陶質で、緑黄色の釉が全面にうすくかかっている。この形は越州窯にもよく見るものである。

皿は(第1図上)口径一〇・二センチ、高さ三・〇センチ、底径三・三センチをはかる。胎土は黄灰色で黄色の釉がかゝつているが貫入が多い。

#### 註

- 1 「瑞応庵ノ地ニ掘リ金探リシ時ノ始末」(聖福寺文庫)三宅安太郎氏の注意による。
- 2 天理大学図書館に原本がある。まだ刊本がない。  
本稿は日野開三郎教授所蔵の写本による。
- 3 中村幸彦教授所蔵の写本による。
- 4 石橋美術館「東洋古陶磁展」目録 昭和三十七年
- 5 近世、聖福寺境内発見の遺物について、古泉愛好家の中でかえって注意されている。

### 三 聖福寺境内発見の遺物とその年代

#### 1 銀錠(銀錠)

瑞応庵では三次にわたつて発見され、享保元年には一壺中より(法馬)八錠、享保八年には一壺より少くとも、(法馬)七拾三箇が出土している。元禄十一年に一壺より「金花銀」が出土、銘のあるものあつたことを記している。出土についての古記録には「金花銀」「法馬」などとしるしているが、これらは後にのべるようにいずれも中国で製造されたもので、「銀錠」、「銀錠」と称せられたものにほかならぬ。

銀錠の形や重量については、幸いに伊東東涯の「盞簪録」や「輜軒小録」に記載がある。中のかるくくびれた長い

福岡市(博多)聖福寺発見の遺物について(岡崎)

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

分銅形で、大きき四寸五分、重き四百九十匁というから、約一三・六センチ、重き一八三七グラム前後となる。銀錠には重きを「花銀肆拾捌兩重」(四十八兩)と記すから、別表にみるように五〇兩の平均約二〇〇〇グラムとしてほゞ合う。客商謝福は加藤繁博士のとくように「銀を官に収めた商人の名」「辨驗銀匠彭禎」とあるのは「銀色を鑑定する銀匠」であろう。「行宣政院福建分院」を東涯は元の時のものとし側失監を元の丞相搆思監にあてたのである。

亨保八年の出土の銀錠は、大なるもの五百匁(一匁は三・七五グラムとすると、一八七五グラム)で、その刻字に一面には「辨驗銀匠彭禎」「華銀伍拾兩重」「客商謝福」とあり、裏面に「金花銀」とあつた。「彭禎」というのは前年の発見品からみても「彭禎」とするが正しく、これらの銘文からみて前年度と全く同一のグループのものである。また「太平興國福建分員經歷使郭德順製」と刻んだものがあつたという。「福建分員」は前年度の発見品では「福建分院」で、「太平興國」のかわりに「行宣政院」となつてゐる。「太平興國」は宋太宗代の年号(紀元九七六年〜九八四年)にみえるが、その他の銘は元祿年間出品とおなじで「太平興國」を年号と解釈するのにいさゝか疑問がのこる。むしろ、宋、太平興國年間に建てられた「太平興國寺にあつた行宣政院福建分院」と解釈すべきであろうか。東涯がはやく、聖福寺出土品を元代にあてたが、『博多古説拾遺』『十三朝紀聞』および『石城遺聞』などには、宋人の百堂時代にあて、元代説を否定しているが、次にのべる点より、私も元代説をとるのである。

宣政院の名は元以前にみる事ができない。「元史」卷三十七に

「宣政院秩従一品。掌釈教僧及吐番之境而隸治之過吐番有事則為分院。……至元初立総制院而領以国師。二十五年因唐制。吐番來朝見於宣政殿之故更名宣政院。」

とみえて、宣政院の名の上限は、至元二十五年(一二八八年)以前をさかのぼらない。かりにこれを上限とおくも、この年は日本では伏見天皇代正応元年にあたり、弘安の役の直後にあたる。

中国発見、唐・宋・元代の銀錠のリスト

I 唐代の銀錠

	発見地名	紀年銘	重量銘	現在の重量	参考	
1	陝西省安市東北大明宮址	天宝10載 (751)	50兩	67.2 兩	計4個	1957年発見 文参57-4
		天宝10載	〃	67.7 〃		
		—	〃	62.04 〃		
		—	〃	65.0 〃		
2	陝西省秦渡地区・北張村	天宝13載 (753)	50兩	2.1 kg	計1個	1963年発見 文物64-6
3	江蘇省南京市北陰陽營	「八年」 「元和」 「九年」 (813—814)	61.55 〃	〃	計白銀7錠 碎銀12塊	1958年発見 文参58-3
		「太和」 (827—835)				

II 宋代の銀錠

	発見地名	紀年銘	重量銘	現在の重量	参考	発見年	文献	
1	西安市南郊大学路	—	—	2000 g	舟形銀錠	1955	文物66-1	
2	〃 〃 文芸路	—	—	1656 g		1960	文物66-1	
		—	—	1907 g				
		—	—	1812 g				
		—	—	1840 g				
		—	—	1531 g				
		—	—	1840 g				
		—	—	1840 g				
		—	—	1807 g				
		—	—	1812 g				
		—	—	1840 g				
3	湖北省黄石市西塞山	—	—	1656 g		1955	文参55-9	
		—	—	1907 g				
		—	—	1907 g				
		—	—	1656 g				
		—	—	1625 g				
		淳祐6年 (1246)	50兩	60市兩				計293個 計3200市兩
		—	25兩	30市兩				
—	12兩半	14市兩						
—	( )	7市兩半						
—	( )	3市兩						
4	湖北省荊州城外	淳祐11年 (1251)	—	—	形制は黄石市の ものとおなじ	1955	文物60-4	
5	内蒙古、昭烏達盟 巴林左旗、毛布力格村	—	50兩	1933 g		1958	考古65-12	
		大觀元年 (1107)	50兩	2000 g				
		政和4年 (1114)	—	2003 g				
		—	50兩	2006 g				
—	—	50兩	2006.5 g					

III 元代の銀錠

	発見地名	紀年銘	重量銘	現在の重量	参考	発見年	文献
1	江蘇省句容県春修水利中 (赤山湖畔)	至元14年	50兩	60.711 市兩	計2個 「元宝」の銘 あり	1956	文参57-5
2	〃 蘇州市虎丘山元墓	大徳8年 (1304) 延祐2年 (1305)			計10個 「丁吉父記」 「□京天舖」	1959	文物59-11

IV 明代の銀錠

	発見地名	紀年銘	重量銘	現在の重量	参考	発見年	文献
1	四川省洪雅県、北門外、 紅星郷、明墓	正徳16年			128個	1955	考古通説 56-3

中国発見、唐・宋・元代の銀錠のリスト

I 唐代の銀錠

	発見地名	紀年銘	重量銘	現在の重量	参考	
1	陝西省安市東北大明宮址	天宝10載 (751)	50兩	67.2 兩	計4個	1957年発見 文参57-4
		天宝10載	〃	67.7 〃		
		—	〃	62.04 〃		
		—	〃	65.0 〃		
2	陝西省秦渡地区・北張村	天宝13載 (753)	50兩	2.1 kg	計1個	1963年発見 文物64-6
3	江蘇省南京市北陰陽營	「八年」 「元和」 「九年」 (813—814)  「太和」 (827—835)		61.55 〃	計白銀7錠 碎銀12塊	1958年発見 文参58-3

聖福寺発見銀錠と同形式のものは、一九五六年江蘇省句容鳳揚立山橋、元代墓より至元十四年（一二七七年）銘（図5）のものが発見されている。これは長さ一四・九センチ、重さ一八九六グラムをはかる。幸い、写真、拓本ともに紹介されている。これで見ると、鑄かした銀を型にながすとその上面は自然に冷却して年輪状の表面となり、その下面は型どりの形を呈する。この型どりの面には「元寶」の二文字を鑄こんでいる。表面には

鑄銀官 提領 大使 副使 庫子楊良珪

平準 至元十四年 銀伍拾兩

提挈司 銀匠 彭興祖 劉慶 秤子韓益

などの文字を型で鑄出している。

至元の年号は元の世祖と、元順帝の二つがあるが、元の世祖とするが適當である。

「盍簪録」の図にみえる聖福寺銀錠のしわ状の墨線は、至元十四年銀錠をみてはじめて理解がつく。

唐、宋代の銀錠は、近年西安市近郊をはじめ各地より発見されている。唐代のものは長方形短冊形のもの<sup>4)</sup>が通例で、中央の彎曲も少い。わが奈良市興福寺金堂須弥壇下で発見された銀錠（図7）は唐代の通制をとっている。宋代の銀錠<sup>6)</sup>は中央両側のくびれがさらにせばまり、元代のものは両端が円くなつて分銅形になる。四川省洪雅県で発見された明正徳十六年（一五二二年）銀錠をみると、さらに両端が円く、中のくびれたいわゆる法馬形をなす。

こうしてみると形からみても聖福寺銀錠は江蘇省句容鳳陽の元至元十四年（一二七七年）銀錠に最も近く、また銘文からみても伊東東涯のいうように元代のものとしてさしつかえないとおもう。

## 2 金製品

元禄十一年には壺中より、金器、金錢、団金、片金、其のほか金でつくつた禽獸、蟲魚の形のもので出土した。亨

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

福岡市（博多） 聖福寺発見の遺物について（岡崎）

保八年には、壺中より、金器の他、金鈴、金虎などが出土している。元禄十一年には、金花を悉く集め鑄し凡そ二百三十余両（二両三十六グラムとすれば約八キロ三〇グラム） 享保元年には金式貫目（一貫三・七五キログラムとして七・五キログラム） 享保八年には金八百八拾銭余（一銭は一両の十分の一、三六グラムとして、計三キロ一六八グラム余）が出土している。これらの形制は散逸しているので明らかでないが、『聖福寺史』によると近世までのこつたものに「金鐸福日」「金銭福日 永保千秋」があつたとつたえている。

### 3 銀製品

銀製品は銀錠の記載に目がうばわれてあまり注意されていないが、享保元年には銀錠以外に銀五貫三百式拾匁壺分（一九・六五キログラム）、同八年には五貫二百九十銭余が出土している。「聖福寺史」によると、近世までつたえられたものに次の如きものがあつた。

銀鐸 福日  
富貴長分

銀銭

銀盞 其の形芙蓉花の如し

銀台 其形桔梗花の如し。福日  
劉君質製

銀瓶

銀秤

同時に発見された銀錠は元代のものであり、それに「花銀」と記すものゝあることは先に記した。そうすると伴出の銀器も宋代少くも元代のものである公算が多いことになる。

宋代では、銀器を酒器、茶器として一般に使用する風が盛んとなつて、北宋の都汴（開封）では、酒楼、茶楼など

で用いられた。南宋になると一部瓷器にかわつたが銀器使用の風は元代にもつたえられた。これは一般庶民生活の向上によるものである。

元代の銀器としては江蘇省呉県（蘇州市）虎丘山北一里洪橋南、黄橋郷、元墓<sup>8)</sup>より銀錠十個とともに八稜銀果盒、銀盃、扁盒、円盒、梅花銀盒、小銀盒、銀水盃、銀尊、銀匙などが発見されており、八稜銀果盒には「聞宣造」、扁盒には「花銀造」の銘があつた。江蘇省無錫市元墓<sup>9)</sup>からは金器（杯、簪、帶飾）漆器（奩、盒、盆、桶）や「至元通行宝鈔」五百文、貳百文鈔などとともに、銀瓶、盒、匱、盆、碗（容器）、七、匙、箸（食器）銀釵、花卉形飾具（装身具）などが発見されている。

宋代のものには、四川省徳陽県孝泉鎮<sup>10)</sup>より発見されたものが代表的である。これには壺、瓶、杯、茶托、盒、尊、薰炉、勺などをふくんでいる。その杯は、蓮花状にひらき、茶托もまたその受花は蓮弁となつている。聖福寺史にいう「銀盞、其形芙蓉花の如し、銀台、其形桔梗花の如し」というのは、こういうものをさすものであるまいか。これらは現在失われてたしかめるに よし ないが、将来また聖福寺境内で発見されることもあろうから、新発見の中国宋代の銀器を紹介して、将来をまちたいとおもう。

#### 4 漆器

宝永年間、虚白院より朱椀五拾具を得たという。この漆器の実物も残念ながら今日のこつていない。これも二つの甕におさめられていたというから、瑞応庵よりの出土状態と近く、近世のものではあり得まい。銀器が宋元代のものとすれば、これも宋元代の可能性がある。

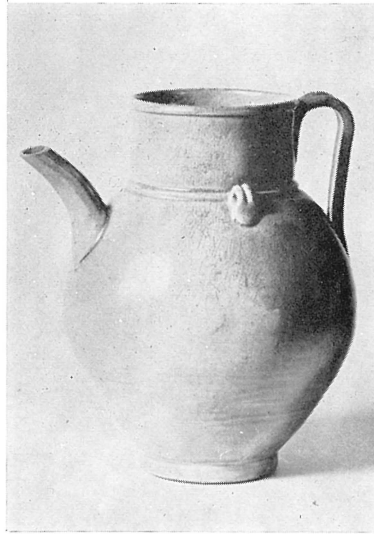
#### 5 陶磁

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

宝暦七年、天得庵の竹林を開く際、南京窯の瓷器大小二十七個が出土したという。皆珍奇の器であったというが、残念ながらいまに伝えられていない。しかし中国舶載の瓷器であったことは疑いない。聖福寺の東南、妙楽禅寺の裏の墓地一帯はいまも青磁が出る。

戦後、聖福寺で発見された水注の形は、唐末五代の越州窯瓷器にもよく見るもので、藤原道長のたてた京都市宇治浄明寺<sup>11)</sup>から発見され、現在京都市立博物館に出陳されているものもつとも優美なものである。



第2図 京都市宇治浄明寺発見  
越州窯水注(京都国立博物館写真)

一九五七年、浙江省余姚県上林湖畔で調査された陶瓷の窯は唐末、五代、北宋代にわたるものであるが、唐末五代の水注が報告されている。おおむね口はラツパ状にひらき、底にけり高台がある。江西省景德鎮梅亭窯<sup>13)</sup>でも五代の水注があり、越州窯水注の影響のあることは明らかである。

聖福寺の例は、越州窯式ではあるが、その窯をたしかめるにいたらない。五代よりも、むしろ宋代に入つてからの製作と考えるのがふさわしいと考えられる。

註

- 1 加藤繁「唐宋時代における金銀の研究」
- 2 この項の関係資料の検索については、日野開三郎教授及び東洋史研究室、愛宕松男教授の教示に負う所が少くなかった。
- 3 「江蘇省出土文物選集」(文物出版社)二〇二。一九六三年
- 4 李閻渠「弥足珍貴的天宝遺物—西安市発現楊国忠進貢銀錠」(「文参」一九五七—四)

- 叶每梅、朱琴華「南京北陰陽宮發現唐代銀錠」(『文叢』一九五八一三)
- 5 奈良国立博物館監修『天平の地宝』図版一三六、(岡崎讓治解説)、昭和三十六年
- 6 朱捷元・黒光「西安南郊出土一批銀錠」(『文物』一九六六一)
- 李逸文「内蒙古巴林左旗出土北宋銀錠」(『考古』一九六五一一二)
- 7 四川省文物管理委员会「四川洪雅九勝山明墓出土的銀錠」(『考古通説』一九五六一三)
- 8 江蘇省文物管理委员会「江蘇省吳興元墓清理簡報」(『文物』一九五九一一〇)
- 9 無錫市博物館「江蘇無錫市元墓中出土一批文物」(『文物』一九六四一一二)
- 10 沈仲常「四川德陽出土的宋代銀器簡介」(『文物』一九六一一一)
- 11 田中作太郎「本邦遺蹟出土の宋磁」(『世界陶磁全集』宋遼篇所収)
- 12 金祖明「浙江余姚青瓷窯址調查報告」(『考古學報』一九五九一三)
- 13 『中国二千年の美』古陶磁と西安碑林拓本展二一八、一九六五年

#### 四

以上のべて来たように、山門・大雄寶殿の間には宋代越州窯系の瓷器があり、瑞応庵の一括遺物には元代の銀錠がふくまれており、また境内もしくはその外郊に陶器、漆器などの出土があつて、宋元代の大陸交渉を示すもののあることはきわめて注意を要するのである。出土地点は広範囲にまたがり、この分ではまだく聖福寺境内にこの種の埋蔵があることが想像できる。

瑞応庵墓地のあたりは、聖福寺の寺地よりやゝ高く、一区画をなしている。山門・仏殿間のあたりはやゝ低平な地域であり、地表下二メートルより少くも宋代陶磁が出ている。この水注はほゞ無傷であり、南宋、元代にまでさがるものではない。そうすると榮西禅師が建久六年(一一九五年)聖福寺を開く以前のものとしてさしつかえない。榮西は宋人百堂の跡にひらいたことをつたえているから、この時代の可能性は充分みとめておいてよい。

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

太宰府の統制<sup>1)</sup>のある時代では、官貿易として太宰府側の役人が、中国側の商人とたちあい、鴻臚館・警固所（いまの福岡市平和台）などで貿易を行っていた。かの地よりもたらされるものは、「竹取物語」などにもみられるように当時の日本人々にとつてきわめて魅力的であつた。太宰府官人などでもうまくやれば私腹をこやすことができたが、太宰府長官、藤原惟憲などは代表的な人物である。

延喜三年八月（九〇三年）、唐船来着に際し、官使いまだ至らざるに富豪、勢家等恣に唐物を買ひ漁るを禁じた（「類聚三代格」十二、禁制）とみえるのは、こういつた事件のたえなかつたことを示している。

この頃の大陸の使人、商人と日本側の官吏の接触交渉の場は太宰府の出先機関である鴻臚館、警固所であつた。

鴻臚館がいまの福岡市平和台（福岡城内、戦前の歩兵連隊）の中にあることを発見されたのは中山平次郎博士の功績<sup>2)</sup>である。鏡山猛教授も、戦中及戦後その遺址の調査にあたられた。奈良・平安時代の遺物の多く出るのはバレー・コート附近より野球場にかけてであつて、野球場の方はその建設工事の為徹底的に破壊されてしまった。奈良時代の瓦は小田富士雄氏によつて太宰府や三宅廃寺にみる白鳳様式の老司式（福岡市老司瓦窯出土瓦を標準とする）に対し鴻臚館式<sup>4)</sup>とよばれている。

平安時代の軒丸、軒平瓦もあり、平瓦に「伊貴作瓦<sup>5)</sup>」または「警固」の押銘を有するものがある。前者は現在の福岡市西郊、杵岐瓦窯の製作を示し、後者は「警固所」を示すものであろう。

鴻臚館の名は、貞観年間までは盛んに文献<sup>6)</sup>にみえるが、貞観十一年（八六九年）五月新羅の海賊が博多津に侵入し、豊前国年貢の絹綿を掠奪して逃走した事件<sup>日本三代實録十</sup>があり、その年、蝦夷の俘囚を配して警固すべき太政官符が出され、これを境として鴻臚館の名はみえず、次第に警固所の名にうつつたものと考えられる。平瓦上の「警固」もそれをさすものに外ならぬであらう。

平和台バレー・コート附近には礎石ある建築址があつた。このあたりより高野孤鹿、大場憲郎氏らの献身的努力に

よつて瓦のみならず、越州窯陶磁片が多数採集され、小山富士夫氏によつてその重要性が指摘された。高野氏の採集品(図2)をみても、碗、水注、壺などがあり、碗は口縁に輪花を伴い、また内部に草花状の文様が(7)あつて、浙江省余姚県上林湖畔の越州窯址出土品と比較すべきものがあるのである。こうなると、単なる貴重品でなく、日常生活の用具としての陶磁が輸入されていることになる。この式のもが、愛知県猿投古窯出土にみる陶磁にも影響をあたえていることはいうまでもない。

ここで採集された粘板岩質の風字硯(9) (現長一センチ、現巾七・五センチ)に

□之年

胡承璉鑄

小蔣置此硯瓦

としるされたものがある。

「日本紀略」後篇二および「本朝文粹」によると承平五年(九三五年)より天徳四年(九五七年)にわたり約十回にわたつて五代・呉越国

よりの通交貿易が記されており、呉越の国名はすでに我国では知られているが、依然、唐物、唐物使などは唐の名前のこされている。この中で呉越の商人蔣承勲の名は、承平五年、六年、天慶元年、天曆七年などの条にみえ、また呉越の商人蔣袞の名も天慶八年(九四五年)、天曆元年(九四七年)の条にみえる。蔣袞は呉越王佐の書状および土宜をすゝめ、蔣承勲は呉越王弘俶の書及び錦繡をもたらしている。

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)



第3図 福岡市平和台発見 小蔣銘石硯

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

この呉越での交易には、交易唐物使として、藤原親盛がおもむいており、太宰府及鴻臚館で交渉が行われ、遺物及文献から考えて、平和台発見の瓦硯にみえる小蔣は蔣承勲、蔣衮もしくはその一族にあてる可能性が少くないのである。

呉越代の中国側の港は、やはり明州で、明州に近い越州窯陶瓷が入る可能性は多く、今後の検討がのぞまれよう。宋になつて、太平興国の初(九七九年)京師に権易院をおき、外国貿易を統制した。『宋会要輯稿四』職官志四十四によると諸蕃国の香藥宝貨の広州、交州、泉州、両浙に至るもの官庫を出すにあらざれば、私に相市易することのできない旨の詔令を出している。両浙には杭州、明州などの港が入ることは想像できる。元祐二年(一〇八六年)には泉州には市舶司を増置し、三年には密州支橋(山東省膠県)に市舶司をおいた。

宋代に入つて宋商の来着あいついだ。寛和二年(九八六年) 大宋国商客鄭仁徳が大宰府に到着したが、日本紀略後篇二同年入宋僧裔然が帰朝している。長保二年七月「大宋福州商客用鈔」(百鍊抄)とみえ。北宋末、日本では堀河天皇長治二年(一一〇二年)八月二十日大宋国泉州人李充の船が筑前博多津に入った時太宰府の官吏が臨検した際の、文書(警固所解)<sup>10)</sup>が、三善為康の「朝野群載」(巻第二十、太宰府附異国大宋商客事)の中にあり、森克巳博士によつて注意された。これには北宋崇寧四年(日本側の長治二年)、明州の提挙両浙路市舶司で発行した「公憑」(ヴィザ)があり、この中に物貨として、

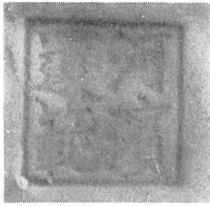
象嵌肆拾疋、生絹拾疋、白綾貳拾疋、甕坑貳佰床、甕堞壹百床

の品目をあげている。甕坑、甕堞というのは、坑、皿形のををさすもので、絹および陶磁を多量につみこんできたことは注目すべきである。こゝでは太宰府、もしくは鴻臚館の名がなく警固所の名があらわれている。

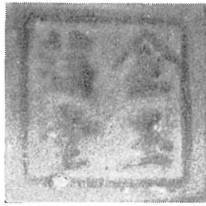
宋代の陶磁は、これまでの浙江省越州窯よりさらに広範囲な地域よりたらされる。福岡市近郊より太宰府にかけておびたゞしい龍泉窯、同安汀溪窯の青磁が発見された景徳鎮の青白磁、建窯手<sup>11)</sup>の天目なども加わる。「金玉滿堂」、「河

浜遺範」銘の青磁碗(第4図1・2)もしばしば発見されるが、これは近年浙江省龍泉県などの北宋龍泉窯址<sup>12)</sup>よりも検出された。北九州では太宰府、博多のみならず各地よりも多量に発見されることがあり、宋代の陶磁が、各地の莊園などにも侵透し、日常品化していることがうかがえる。このうちあるものはさらに東にはこぼれたが、東国では、こわれやすい中国陶磁を北九州のように亨受すべきもなかつた。古瀬戸窯<sup>13)</sup>で景德鎮を含め宋磁を盛んに模作したのもこうした動きを示すものといえよう。

大陸より、明州の両浙市舶司を經由するにせよ、福州、泉州など福建省海岸部の港の商人が来



1.



2.



3. 4.



第4図 福岡市近郊発見、宋元代中国陶磁 1. 太宰府近郊(柳沢義幸氏蔵)  
2. 福岡市箕子浜(九大考古学研究室) 4. 福岡市今宿(二宮八郎氏蔵)

福岡市（博多） 聖福寺発見の遺物について（岡崎）

着し、南宋にいたつてます／＼この傾向をふかめたにちがいない。来住の商人たちは、鴻臚館にはすまず、それ／＼便宜のところに住みはじめた。この点、いまの福岡市内の博多津及び管崎八幡宮領は、海港としてもふさわしく、内陸にもつながる利点をそなえ、宋商人のみならず流入する人々も多く、都市的な発展をみせるようになった。「小右記」天元五年の条によると博多津に來た宋商人が滞在三年にわたり、政府買上品の代価を下附されず困窮したことがみえることも、博多がむしろ民間の商業都市として存在していたことを示すものであろう。また「石清水文書」卷五宮事縁事抄管崎造営事によると、仁平三年（一一五三年、南宋紹興二三年）太宰府目代、藤原宗頼が府の檢非違所別当安清、同執行大監種平、同季実等をして兵を率いて管崎、博多方面を侵略させたことがあつた。この時は宋人王昇後家以下千六百家の資財を運び去り、さらに管崎宮に乱入して神殿、若宮宝蔵を破壊して、神体宝物等を奪取し、神人供僧を刃傷したことがつたえられている。

この記録を信ずるとすれば、管崎、博多は少くも千六百家を数える都市に成長していたのであり、またこゝに宋人（商）が多数すみついたことが察せられるのである。

このころから宋船はしばらく博多津につかず、かわりに仁和寺宮の莊園である今津が登場して来る。今津は現在福岡市今津（旧福岡県糸島郡今津村）にあたり、南に面した入海の大部分は干拓されている。榮西禪師<sup>15)</sup>は仁安五年（一一六八年）、博多津において宋通事李徳昭に会い、宋船で出帆、明州に到着、天台山及び明州阿青王山を巡りその年東大寺の僧重源とともに帰国した。嘉応元年（一一七〇年）中原氏の女が今津に誓願寺を建立、主としてこゝに住んだ。この間平家は壇ノ浦に滅び、源氏の世の中となつていたが、かれは文治三年（一一八七年）再び渡宋、さらに天竺にわたらんとしてならず、天台山万年寺に学んで、建久二年（一一九一年）帰国したのである。

中山平次郎博士<sup>16)</sup>は今津の勃興を、博多港（袖の港）が那珂川をはじめとする河川の泥土のためあさくなつて一時廢港になつたので、宋船が博多より今津に入るようになったことを説かれたが、むしろ、仁平三年の博多・管崎焼打事

件などにみる不安定な条件をさげ、一時内陸部より独立した今津に宋船が来着したとする方が考えやすいのではあるまいか。平清盛や鎌倉時代になると、再び袖の港（博多港）にかえるのも、こうした条件を反映しているものとみられよう。

宋人王昇以下の千六百家の中には、後世つたえる「宋人百堂」の地域がふくまれていたはずである。聖福寺所蔵の建久六年文書は、いささか疑問があるものであるが、宋人百堂の伝えは一概に否定できぬものがある。

博多百堂地者、宋人令建立堂舎之舊跡也、而件精舎破壊之後、再不修營之間、偏為空地、雖送星霜、既亦依為佛地、人類不居住、仍建立一伽藍、欲備大菩薩御法衆、致本家御祈禱并建立堂舎、安置丈六釈迦弥陀弥勒三尊、鎮護國家、且為兇徒之障礙、且為備向後之證跡、殊被仰下可加守護之由者佛法興流之御願何事如之哉者、賜御下度欲遂造営之功而已

建久六年六月十日 榮西言上

近年、聖福寺境内より発見された越州窯系陶磁はどうしても、聖福寺建立以前のものであり、むしろ宋人百堂の時代とする方がふさわしい。地下二メートルの所より出土したというのは、劫掠をおそれて埋置したかその所は将来の発掘に待つ外はない。

鎌倉時代に入つて、博多は再び繁栄をとりもどした。建保六年（一二二八年）博多の綱首張光安が笹崎檢校行遍の子孫のため殺害された時、張光安（長光安）の帰属した大山寺の本山延暦寺と笹崎八幡宮の本所石清水八幡宮寺の間に笹崎宮をあらそつたことがみえ、仁和寺次記、華頂要略百二十一所収天台座主記また建長年間に宋人博多綱首張興、張英が笹崎宮に帰属し、張興は通事をなし張英は鳥飼二郎船頭と号し、堅糟西崎の地を領有していたことがつたえられている。石清水八幡宮記録  
二百三十八  
八幡宮笹崎宮造営材料目録 こうしてみると、鎌倉時代には笹崎、博多に張氏という綱首がいたことになる。綱首の名は前にいつた長治二年（八九六年）警固所解にもみえ、船主であり、商会の長を意味する。

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

かつて福岡市簀子町浜の埋立に際し、宋銭、湖州鏡とともに「張綱」の名を記した黒色釉天目茶碗<sup>17)</sup>が発見された。これは口径二・二センチ、高五・八センチをはかり、平底のはしをはずつてゐる。この式の天目茶碗は、福岡県筑紫郡太宰府町崇福寺址<sup>18)</sup>よりも発見されており、南宋より元にかけての建窯手のものと想定することができる。「張綱」というのはいうまでもなく「張某」の「綱首」を意味するものと考えられ、先にあげた岡崎、博多の綱首張氏のことを想起せしめるものがあるのである。

文永の役（文永十一年、一二七四年）および弘安の役（弘安四年、一二八一年）は、元側にとつても一大誤算であり、わが鎌倉幕府にとつても重大な衝撃であつた。しかしこの事件で日元交渉は決して断絶したわけではなかつた。元軍は、至元十三年（一二七六年）南宋の行在臨安府を陥れ、翌年泉州を攻めた。泉州の商人蒲寿庚<sup>19)</sup>らの協力によつて、泉州を陥れ、至元十六年、元は天下を統一した。「元史」卷九十四、食貨志市舶によると至元十四年（一二七七年）泉州および慶元（明州）、上海、澈浦（浙江省海塩県）に市舶司をたてゝゐる。さらに至元二十一年（一二八四年）には市舶都運司を杭州、泉州の二州に設け、貿易の利の七割を官に入れた。これは杭州、泉州の港の重要性を示すとともに元の海外貿易積極策を示しているのである。先にのべたように聖福寺発見の銀挺はその銘文より考慮し至元二十五年（一二八八年）以前にはさかのぼらないが、福建において対外貿易の必要上、発鑄されたものだと考えられる。

マルコ・ポーロはその『東方見聞録』中に泉州（ザイトン）について次のように記している。

「此処には港があり、印度からのあらゆる船が高価な商品を積載し来る。……また此の港からマンジのあらゆる商品が積み出される。……印度から来る総ての船は商品の一割を納めるので、大汗は此の港から莫大な収入を獲得してゐる。……此の港はその貿易の量に於て世界最大の二つの港の一つである。……此の地方では想像し得る限りに於て最良の色々の型の磁器が製造される。その種は頗る多く且つ廉価で、ヴェネチヤの一グロッソ（Grosso）の値で想像し得る限りの最良の磁器を購ふことができる」<sup>20)</sup>

かれの日本 (Gipang) に関する知識の中で、元の都で聞いたものゝ外に、金や真珠の豊富さ、モウコ軍の日本侵入の時の船や難破、漂着のはなしにかなりスペースがさかれていることから考えて、泉州または杭州などできいた話がいっていることが考えられる。

「元史」には正式の日本との交渉については、その「日本伝」に至元十四年(一二七七年)日本の商人が金をもつて来り、銅銭とかえたとみえ<sup>21)</sup>、これは弘安の役の前年であり、その後も銅銭の流出がやまず、至元二十三年(一二八六年)元は外国貿易に銅銭を用いることを禁じ、至元二十九年(一二九二年)には、日本船が四明に入港して貿易をもつめたことが元史世祖本紀にみえている。民間の貿易によつて銅銭、陶磁等の舶載されるものも少くなかった。また嘉暦元年(一二三二年)鎌倉浄妙寺の太平妙準がその徒安禪人を入元せしめて福州版大藏経をもとめ、また元代の銘を有する漆器も日本では少くないのである。以上のべたように聖福寺瑞応庵発見の元代銀錠は福建で鑄造されたものが、元商人(綱首)によつてもたらされ、大規模な決済の手段にあてられたものであろう。このころには聖福寺はずでに建立されていたはずであるが、その境内か、門前におけるかれらの貯蔵になるものであつたか今後にまつ外はない。いづれにもせよ博多は<sup>23)</sup>、銀を流通手段とする都市として、大きな役割をはたしていることが看取されるのである。

註

- 1 森克己『日宋貿易の研究』(昭和二十三年)は、これまでの資料を整理されている。
- 2 中山平次郎「古代の博多」(『考古学教法』第一六一七巻)連載
- 3 鏡山猛「太宰府と博多」『日本の考古学』歴史時代下)昭和四十二年
- 4 小田富士雄「九州における太宰府系古瓦の展開」、一一三(『九州考古学』一一六)昭和三十一年
- 5 福岡市教育委員会「福岡市福岡城跡採集遺物調査報告書」昭和三十六年、小田富士雄執筆
- 6 竹内理三編「太宰府天満宮資料」二
- 7 岡崎敬「唐・五代の越州窯青瓷と太宰府」(石橋美術館「東洋古陶磁展」目録)昭和三十七年
- 8 金祖明「浙江余姚青瓷窯址調査報告」(『考古学報』一九五九一三)

福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について(岡崎)

- 福岡市(博多) 福聖寺発見の遺物について(岡崎)
- 9 高野孤鹿「小蔭硯について」(『史跡福岡城跡発掘調査概報』所収) 一九六四年
- 10 森克己「前掲書」三六―四一頁
- 11 日本に舶載された宋代陶磁については  
田中作太郎「本邦遺蹟出土の宋磁」、蔵田蔵「経塚出土の宋磁」(『世界陶磁全集』宋遼編所収)、昭和二十九年九州に舶載されたものについて
- 小田富士雄「古代中世に於ける手工業の発達―窯業九州」(『日本の考古学』歴史時代上、所収) 昭和四十二年岡崎敬「唐・五代越州窯青瓷と太宰府」(前掲)
- 12 金祖明「龍泉溪口青瓷窯址調査紀略」(『考古』一九六二―一〇)
- 朱伯謙・王士倫「浙江省龍泉青瓷窯址調査発掘的主要収獲」(『文物』一九六三―一)
- 赤塚幹也「古瀬戸」(『陶器全集』昭和三十六年)
- 13 森克己「前掲書」二六〇・二六一頁
- 14 榮西禅師の伝記については多賀宗隼「榮西」(『人物叢書』昭和四十年、森鹿三「喫茶養生記」註(『茶道古典全集』所収))
- 15 中山平次郎「博多津沿革に関する私見」(『歴史地理』二七一―五)
- 16 山本博「博多湾出土遺物と元寇役への新資料」(『都久志』第三号) 昭和六年
- 17 昭和四十二年七月九月、福岡県教育委員会の手で調査された。团长太田清六教授、発掘主任宮小路賀宏氏である。
- 18 元軍の泉州攻略および蒲寿庚の家系の南海貿易における立場については、左の名著がある。
- 19 桑原隲蔵「蒲寿庚の事蹟」昭和十年
- 20 岩村忍「十三世紀東西交渉史序説」(昭和十四年) 二六六・二六七頁の訳による。
- 21 森克己「前著」、木宮泰彦「日華文化交流史」第三章元との貿易、四二八頁、昭和三十年
- 22 原田淑人「元代鍍金経箱の銘文について」(『東亜古文化論叢』所収)
- 23 福岡市博多、櫛田神社所蔵のものに博多銀というものがある。これは古く「石城志」や「金銀図録」にも紹介されているが、「□禄二□」銘のものを、「金銀図録」では文禄とよみ、「石城志」では亨禄とよんだ。しかし、櫛田神社蔵の他のものに一面に「博多、政所」一面に「天復元」(一二三三年)とあるものがあり、また「博多、正安二年、政所」(一二三

〇〇年」とあるものがあつて、いずれも鎌倉時代のものであり、「□□」も嘉禄二年（一二二六年）とするのが、ふさわしい。これらは秀吉時代の譲葉銀でないことは明らかである。むしろ聖福寺瑞應庵発見品のごとき元代の中国銀鈔の影響を考えることができるのではないかとおもう。

## 五

博多聖福寺で江戸時代以来発見された銀鈔、陶磁などの遺物をたどつていくと、いろいろの新事実にぶつつかる。博多の街は幾度かの戦火でやかれ、また復興して組織的な発掘は困難であるが、以上のべたように対外交渉史また日本の文化史上、きわめて重要な問題をふくんでいるのである。禅宗史上、采西のはたした役割はこれまで幾度かとかれたところであるが、この度は考古学的資料によつて聖福寺のもつ意義を整理し、その重要性を強調したのである。

## 後記 1

采西禪師と聖福寺の問題は、仏教史、対外貿易史のみならず、日本人の生活史の上からきわめて重要な意義をもつものである。先年鏡山猛教授と前老師をたずね、越州窯系水注を拝見したところから、少しづつノートを整理していたのであるが、昭和四十二年八月、茶の起源研究会の背振山の茶樹及中世遺址の調査に参加し、再びこの問題を考えてみたのであつた。たま／＼日野開三郎教授より所蔵の伊東東涯「盞簪録」の写本を拝見するに及んで、この機会に関係資料を紹介することにした。聖福寺については現老師龍洲博道師、同瑞應庵の梅巖自悦師、また聖福寺文庫の三宅安太郎、筑紫豊氏にはとくに御世話いただいた。東涯の論説の写本については日野先生とともに中村幸彦教授の好意を得た。「盞簪録」の原本は天理大学図書館にある古義堂文庫に収められておるよしであり、東涯がどういう資料にもとづい

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について（岡崎）

たか将来明らかにできればありがたい。

聖福寺の全景写真は朝日新聞西部本社航空部の好意による。また写真については、石橋美術館の山上高寛氏、浄明寺水注の写真は京都国立博物館、聖福寺陶磁の実測は小田富士雄氏の御協力をわずらわした。小山富士夫、藤岡了一氏には陶磁について御教示を得たが、太宰府、博多関係の中国陶磁資料の集成と分類はさらに期待される所である。太宰府・博多に関する編年資料については竹内理三教授、日宋貿易については森克己教授の著書をフルに利用させていただき、文献資料については新城常三教授の指教を得た。また宮崎市定教授の「五代宋初の通貨問題」（昭和十八年）、森鹿三教授の「喫茶養生記」註につけられた榮西の事蹟と年譜には多くのヒントを得た。近年幸い大陸側の考古学的資料が紹介され、これと対応することが次第にできるようになった。この一文はこれを重点としている。

## 後記 2

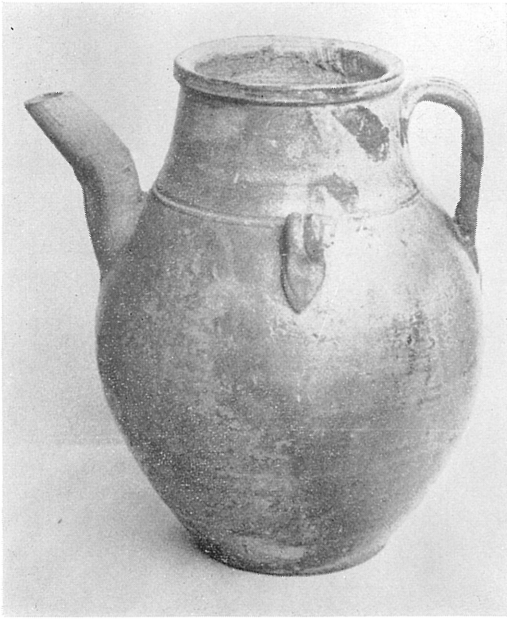
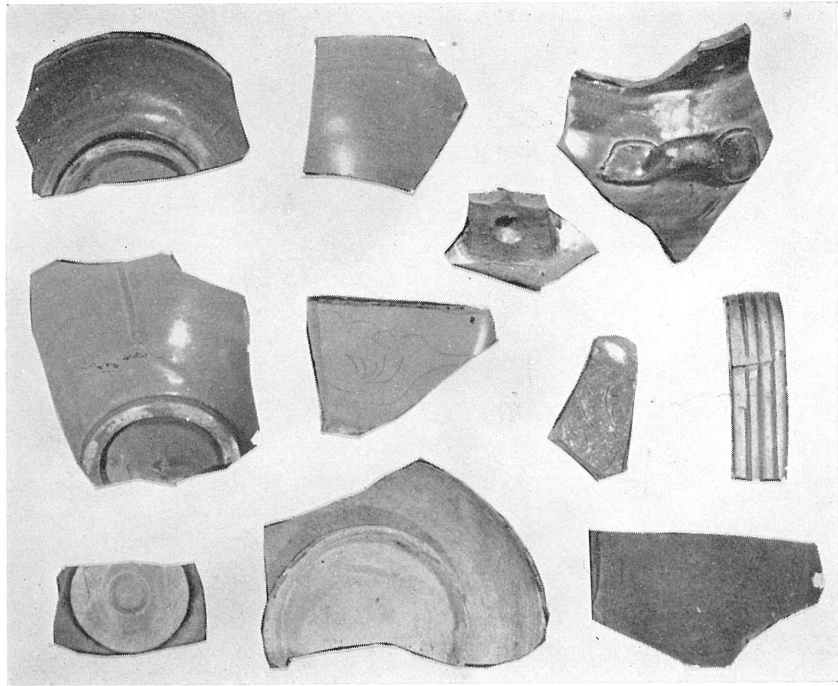
本稿の再校中、二月二十日より数日間にわたり、聖福寺・瑞応庵の三宅家の墓地が改葬された。九州大学医学部の永井昌文助教授、三宅安太郎氏、県文化財の宮小路賀宏氏らとたちあうことができた。今回は改葬のみにとどめた。折から白雪がつもり「雪庭智白禅尼」の歿時もこのような光景を呈したであろうと語りあつたことであつた。

おわりに、本稿をかくのにあたり、多くの方々の御協力と御好意をわずらわしたことを一筆御礼を申しあげておきたい。

（昭和四十三年二月二十八日）



1. 空からみた博多・聖福寺の全景

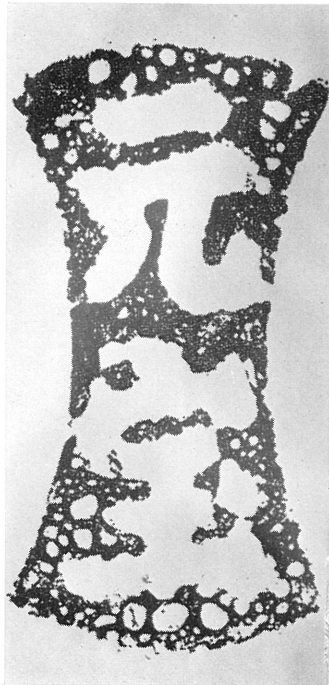
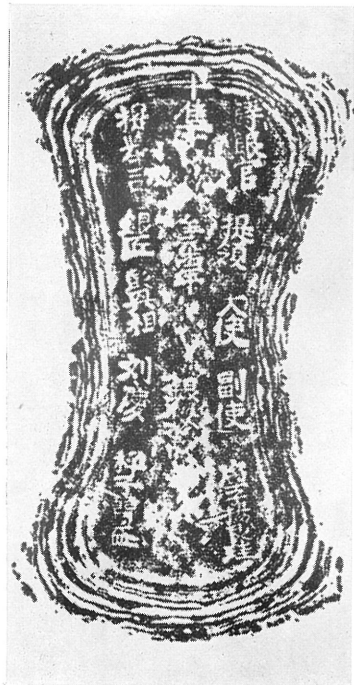
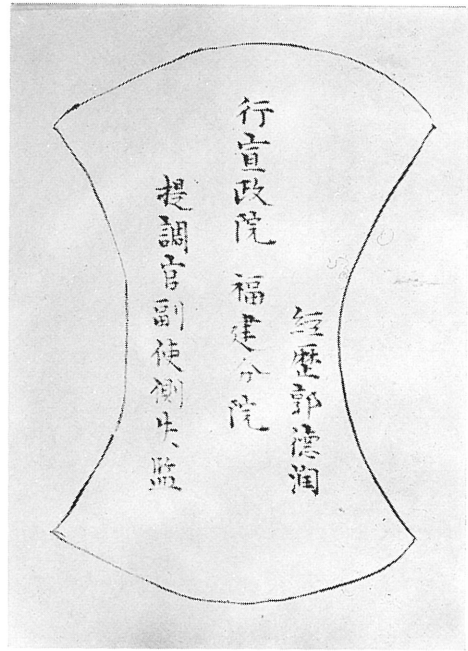
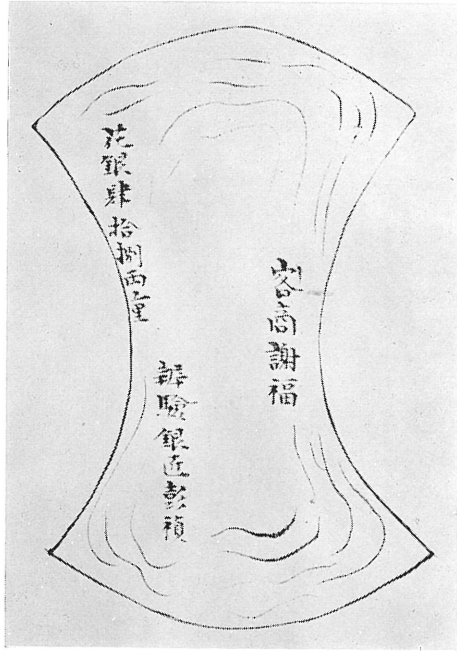


2. (上) 福岡市平和台発見越州窯青磁

福岡・高野孤鹿氏藏

3. (下左・右) 福岡市聖福寺発見越州窯系青磁・水注

聖福寺藏

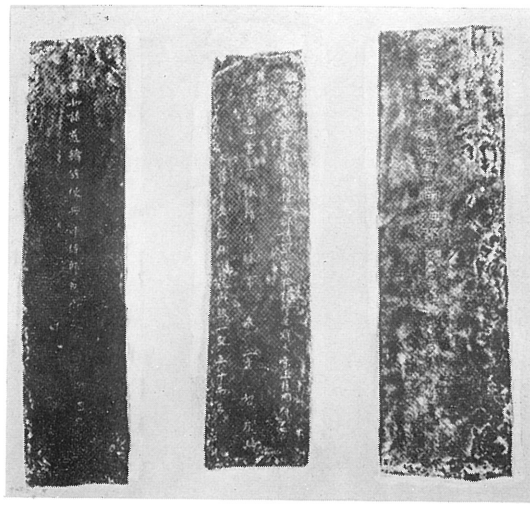


4. (上) 福岡市聖福寺瑞応庵発見銀錠

(伊藤東涯「壺管録」による)

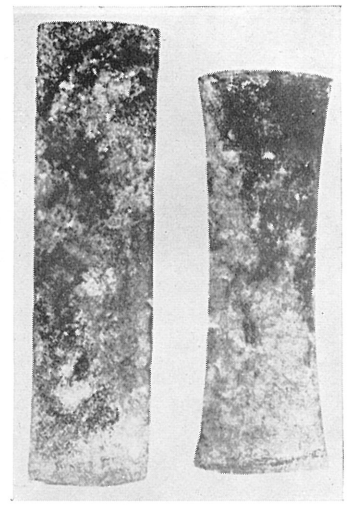
5. (下) 江蘇省句容県発見、元・至元14年(1277)銀錠

(「文物参攷資料」1957-5による)



6. (上左) 陝西省西安市東郊発見唐代銀錠

7. (上右) 奈良市興福寺金堂発見銀錠



(「文物参攷資料」1957-4による)

東京国立博物館蔵



8. 内モウコ・巴林左旗発見北宋銀錠

(「考古」65-12による)